

と。卜辭中にある土は相土にして契の子昭明の子たること。楚辭
天門の該乘秉德 恒秉季徳の該は王亥にして季 卽ち冥の子たる
こと。殷書契後編に王亥に關する卜辭七事ありて之が殷の先王
先公たること疑無きこと。王亥の外に卜辭中見ゆる所の王恒は鐵
雲戔龜及び書契後編等にも散見し之に聯關して滋邊 狄易の古代
に於て同音を有し、商の祖先冥、河を治め、王亥殷に遷り次で商
邱に據り有易高燥の地に游牧せしが有易の人遂に王亥を殺せし
こと。従つて楚辭天問の昏微循跡有狄不寧とある微の上甲微たるこ
と、湯以前に在りて殷室を復興せし人として殷人の特に尊敬せし
上甲の名は未だ殷虛書契中には發見せられざりしが今偶然卜辭
中より之を發見せしこと。等にして其他報丁、報丙、報乙、主壬
主癸、大乙、唐、羊甲、等を論証し唐は湯、羊甲は陽甲ならむと
推し、史に出でたる帝王の名にして卜辭に見ゆる者、並に卜辭
に見ゆる父甲、兄乙等の人名にして史に見ゆる所の者を擧げ、
卜辭に在りて史に無き所は皆諸帝の異名及び其の兄弟の未だ立た
ずして殞せる者なることを論斷し商の繼統法の弟に及ばずを主と
し子に繼ぐを補助とせしことをも論説せり。「藝文」第八年第八號
所載の内藤博士の「續王亥」は此王國維氏の研究を批評的に紹介せ
られたるものにして相参照すべきものなり。「那波」

● 世界に於ける希臘文明の潮流 文學博士 坂口 昶著

希臘文明に關する論著本邦に多しと雖も、アレキサンドル大王
以後に於ける該文明の世界的弘運の威力、古今に亘りて貫通せる
その潮流を包容して歴史的に尋究闡明せるものあらず。本書は著
者がかの徒に希臘文明の嘆美鼓吹に陷るを却け、世界史の地に
立ちて公平普遍なるこの文明主潮の影響價值を論述せるものにと
て、唯一學界に於ける一部の欠陥を補ふべき述作たるべし。今篇八
章より成り、これに序論並に結論を附せり。先づ序論に希臘史の各
時期を通觀して、アレキサンドル大王以後の世界的個人的なる現
代的文明即ちヘレニズムに及び、第一章に古典的文明時代の都市
國家を説き、第二章にアレキサンドル大王の東征を論じてヘレニ
ズム時代に入り、第三章に該時代初期の雅典の位置を觀察し、第四
章に希臘文明の東方傳播即ち小亞、埃及、シリア及印度中亞方面
に及ぼしたる勢力影響を述べ、殊に當代ヘレニズムの中心地たる
アレキサンドリヤを説くこと詳なり。第五章に入りては轉じて新
興の羅馬に及ぼしたる影響を論じ、第六章には基督教の發展に對
する希臘文明の寄與の甚大なるを説き、次で第七、第八兩章に於て
中世以後現代に至る該潮流の消長を「近代文化と古典」なる題下に
要約し、ピサンツと同教、學藝復興人生派、啓蒙運動古典派、ロ
ーマンチック運動に亘りて希臘文明の勢力を説き、最後に該文明

の價值を結論として筆を擱げり。以上の各章に亘りて著者の識見と蘊蓄は到處に窺知し得られ西洋史界稀有の好著として、本書の公刊が學界に裨益を興ふるに大なるは論なし、而もこは昨年の京都大學夏期講演會に於ける講演より成れるを以て、その説述平易を旨とし、考證を避け論旨簡明峻達にして興趣深き筆致は一般公衆にも容易に其綱領を會得せしめ得べし。加ふるに各章末に添附せる約百餘箇の寫真圖は本文と相俟ちて讀者に有益なるものならん。(文會堂發行、價二、五〇)〔植村〕

●登山の注意

日本山岳會著

近時登山の趣味青年學生の間に普及し、夏期に於ては富士の如き日本アルプス諸峯の如き登山者相次ぐに至りしは學術研究上又剛健の氣風養成上に頗る悦ぶべき傾向なるが、而も不用意の爲めに往々山中に慘死するものあるは頗る危懼の念を懷かしむる所なり。本書は登山の際の危險を詳説して冒險的の登山者に警告と注意とを與へたるものなり、此種の著作は從來これなきにあらざれども本書は登山専門家の團體なる日本山岳會の手になりしものにて聊か他と異なるものあるを覺ゆ。本書、初めの登山の危險なる理由を述べ、次に氣象上の激變に基く危險、山嶽に固有なる危險、危險を避くべき手段、登山の準備事項等を長き間の經驗に基づき且歐洲に於ける登山術 (Alpinism) を參酌し記述したるものにして、

人夫使役の手加減、天幕の張り方等にまで及ぶるは極めて懇切且つ周到と云ふべし、登山者並びに山岳研究家の指針として一讀すべき良書なりと信す。(日本山岳會發行、非賣品)

●地球上に於ける植物群界の分布に就て 神谷辰三郎著
本篇は「サイエンス」第七卷の特別號として出でたるもの、著者は元第七高等學校造士館教授として植物學を講じ、今島津製作所に入りて研鑽を續けつゝある篤學の士なり。著者の取扱へる如き植物地理學は地理學の一分科として歐米に於ては可なりの發達を遂げたるも比較的新しき學科なる上之が關係する科目頗る多く最も主要なる地理學植物學は勿論廣く分類學 生理學 地質學 氣候學、經濟學等に通曉せざるべからず、是れ本科の進歩進々たる所以にして殊に我が國にては組織的に此の種の試みをなしたるものあるを聞かず、著者此に見る所あり、植物學の見地にのみ偏せず地理學の外廣く關係學科をも考慮して從來闕却せられし方面を開拓せしものなり、其記述の方法は各地方に就きて地形氣候等の環境を明かにし之に應じて如何に植物區系 (Zones) が分布され此等が人生に及ぼす影響等を論じたるもの、而して各大陸の區劃の細分は主として地形によりたる氣候を基としたるをありて一定せざれども要は其地方の特有の植物區系をなすものを取りて單元とせり著者自らも頁數に制限せられて唯一般的記述に止めて植物地理學